巻頭言

ファジィは今

株式会社 FFC プロジェクト推進センター 伊藤 修

「最近の日本のファジィ研究に魅力がない」とのヨーロッパ研究者の話題を最近の学会誌で目にした。肯定する人、否定する人、発信する人、反応は様々と思う。確かに、会員数と法人会員数が減少する傾向があると言われている。それに対する関係者の努力に敬意を表わしたい。私はそれに対しても、研究側からの視点ではなく、使い方からの視点に注目したいと考えている。それは、ファジィが制御の分野で認知されたことを振り返れば理解できると思う。

1980年代前半、制御の分野では最適制御理論が脚光を浴びていたが、現在ではPID制御がまだ多く使用され、「理論と実際のギャップ」が顕在化していた。しかし、産業界では自動化への要求が非常に強く、設備投資も増大していた。その中で、熟練運転員の操作を表わし制御規則を用いるファジィ制御が注目された。そこには、ファジィを認知させ、制御の分野へ応用しようという研究者達の意欲と、プロセス制御分野で求められていた連続運転からスタートアップ、シャットダウンまでの操作の自動化に応えようとする現場開発者達の思いがあった。

それでは、今回の学会を取り巻く状況はどうだろうか。インターネットに代表される情報化の流れは産業界だけでなく一般家庭まで入り込み、情報の洪水は良い面、悪い面もあわせている。それらの情報をコントロールし、氾濫する情報の集約や意味理解あるいは情報セキュリティへの要求は強く、ファジィ制御前夜と同じ状況にあると私には見える。これらの分野こそ、正にファジィの得意とすべき分野であり、産業界の求めるに応えられるテーマと思う。

ファジィは言葉の持つ「あいまいさ」を扱い、制御分野ではアナログとデジタルを結び、多くの情報を集約する方法論としてその効果を示した。敢えて加えるならば、現場の課題に適用し、その効果を目に見える形で示す方法で研究開発が進められた。ＩＴパブリックがそして今、地上に着いた情報化社会の中で、人間とデジタル情報を結ぶ方法論として、ファジィの果たすべき役割は大きいと思う。

日本知能情報ファジィ学会は、幅広い分野の研究開発者を集める学会として、産業界の課題に応え、研究者自らが実践する応用指向も必要であろう。そうでないと々からの評価と刺激を失い、飽きられてしまうだろう。産業界の会員の減少、産業応用やＩＴ分野の研究論文の少ないことは、その表われとも言える。これらの点からも、使い方からの視点に立ったＩＴ研究者が一人でも増えることに期待したい。

ファジィ制御が示していることは、「使う側からの視点」であり、社会のニーズに応える現場開発者との「コラボレーション」の重要性である。このことをもう一度再認識することが、「日本発のファジィ」の新たな突破口になると思う。